

審査の結果の要旨

氏名 新居 池津子

学校図書館は、1953年の学校図書館法制定により、全国すべての学校に設置されている。しかし、学校図書館が生徒によって実際にどのように使われているのかを解明した研究は少ない。本論文は、中学校の学校図書館という場所が、生徒によってどのように意味づけられているのかを、参与観察と質問紙調査ならびに教師へのインタビューから実証的に明らかにしようとした論文である。論文は、全3部6章から構成されている。

第Ⅰ部第1章では、学校図書館に関する先行研究を概括し、図書館情報学の視点からこれまで研究がなされてきているのに対し、本論文は教育学や建築学が提示している「居方」の概念をもとに、生徒による意味づけを問うこと、その際に閲覧机や書架という物理的特徴およびその特徴から心理的に構成される仮想境界面に着目し研究を行うことが示される。そして第2章では、研究対象校の概要やマイクロエスノグラフィーの研究法が述べられる。

第Ⅱ部第3章研究1では、B中学校の昼休みの図書館利用に関する336名の質問紙調査回答結果と延べ474名の昼休みの利用についての1年間の行動観察から、当該図書館の居場所を6か所同定し、書架のブラウジングや漫画を読み寛ぐ等の図書資料に関わる行為が多くみられることを明らかにしている。続く第4章研究2では、事例をさらに微視的に分析し、他者にとっても居場所と認識される場所の中に、生徒は自分の居場所を見出し、図書資料の利用が主な目的とは限らない多様な居方がみられること、他者と距離を置いて個人が過ごす場所が学校図書館内に多発的に創出されることを明らかにしている。

第Ⅲ部第4章研究3では、A中学校国語科5時間の読書活動の授業を対象に、教師が生徒間の交流を促す物理的な特徴を持つ閲覧机を利用して支援を行うことにより、図書資料に関わる居方が生徒にみられるようになることや、閲覧机を介した支援は読書活動を苦手とする生徒の個別支援となるだけでなく、教師の意図に沿い生徒の読書のジャンルの幅を広げることにも結びつくことを明らかにしている。また研究4では、B中学校理科6時間の探究的な学習活動の分析から、教師が図書資料を直接手に取ることができる物理的な特徴を持つ書架を介した利用支援を行うこと等により、生徒が学校図書館を情報収集する必要性や方法を学ぶ場所として意味づけていることを示している。続く第5章研究5では、生徒と教師の談話分析から、学校図書館の物理的な特徴を利用した「仮想境界面」を介して、教師に支援を求めやすい関係を築くために生徒が教師に交渉を行い、教師も教育課程での支援の意図を拡張することが仮想境界面で行われていることを明らかにしている。そして、第Ⅳ部第6章総合考察では、5研究の知見を総括し研究の理論的意義と今後の課題を整理し論じている。

本論文は、学校図書館の物理的特徴と生徒や教師の相互行為の関係を、居方という生徒側の視点から、授業分析等で用いられるマイクロエスノグラフィーの手法を用いて実証的に問うた点で独自性が高く、学校図書館利用をめぐる学校教育学の新たな研究や実践に寄与する論文である。よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するにふさわしい水準にあると判断された。